



夏目漱石と東工大

漱石の本学における講演はいかにして実現したか？ そしてその後日談は？

総理大臣の招待でも、葉書一枚で断ってしまう夏目漱石が本学の前身である東京高等工業学校で講演していた。しかもその講演記録（要旨）が、当時文芸部が発行していた「浅草文庫」に残されていることが分かった。どのようにして漱石を口説いたのか？漱石はどのような話をしたのか？漱石が後悔したというのは本当か？その他、漱石ないしは漱石の作品を題材に健筆をふるった本学教員（伊藤 整・江藤 淳）も簡単に紹介する。

漱石研究者の一文が 本学同窓生の目に留まった

夏目漱石（1867～1916）が東京高等工業学校（高等工業）の文芸部に招かれて講演をおこなっていたという耳寄りな情報が寄せられた。“高等工業”といえば本学の前身だ。さっそく調べてみた。情報を寄せてくれた野木政宏（1975 社工, 77 MS）は、学生の頃から多方面に興味があり、岩波書店の『図書』^{（注1）}を定期購読している。その2014年4月号に「…漱石は…『道草』を書く前年、大正3年1月17日に東京高等工業学校の文芸部に頼まれ…講演をした…」^{（注2）}と書かれていてビックリするやら嬉しいやらで、「蔵前工業会」に知らせた。そのメールが 私たちの資

史料館に転送され、司書経験者が奔走して、講演録を入手することができた^{（注3）}。

(i) 漱石が講演をおこなった大正3年（1914）は今からちょうど100年前になること、(ii) その講演録が載っている雑誌『浅草文庫』は本学（高等工業）の文芸部が発行していたこと、(iii) 本学教授だった江頭淳夫（えがしら あつお、ペンネーム：江藤 淳、1932～1999）が『漱石とその時代』をライフワークとして、文芸評論活動を展開していたこと、さらに (iv) 講演の冒頭で漱石が述べていることが非常に興味深いことから、ここに一部を再録し、紹介することにした（全文は、資史料館 Web page の刊行物→よもやま話に掲載）。講演の冒頭が興味深いのは、“出不精”だった漱石が

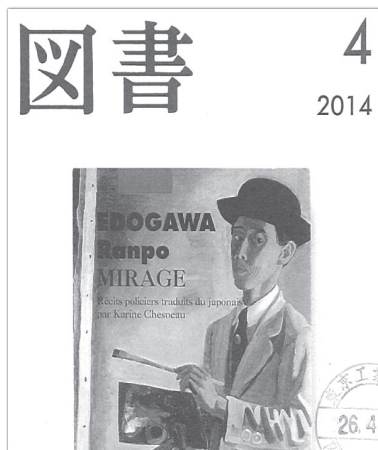
文芸部員の“シツコイまでお願い”にとうとう根負けして講演を引き受けることになったと告白しているからだ。漱石については、妻の夏目鏡子（1877～1963）が次のような逸話を残している^{（注4）}。

西園寺首相をソデにした漱石

『虞美人草』を書きかけている最中（1907年〔明治40〕6月14日）、内閣総理大臣の西園寺公望（さいおんじ きんもち）さんが、有名な文士を招じて、一夕の雅宴を開くという例の「雨声会」の招待が夏目のところにも参りました。こんなことは めんどくさいほうの夏目は、すぐにはがきにお断わりの句を書きました。それは、《時鳥（ほととぎす）厠（かわや）半ばに 出かねたり》（トイレ



図① 夏目漱石（千円札で慣れ親しんだイラスト）。



図② 漱石が本学で講演した話しがでている岩波書店の「図書」。



図③ 本学の文芸部が発行していた部誌「浅草文庫」。残念ながら、漱石の講演録が載っている第31号（1914）の原本は、本学には残っていない。

ベルクソン・ブームの渦中で、漱石はそのような扱いを受けた。『道草』を書く前年、大正三年一月一七日に東京高等工業学校の文芸部にたのまれ、ベルクソンの芸術観を基に「文学の方法と法則」について講演した。前座をつとめたのが中沢臨川で、ベルクソンについて解説書を出していたが、中味は要約と孫引きばかりで頂けなかった。おそらく彼と同列に扱われたのが釈然としなかったのか、漱石の講演はぶっきら棒な調子で終了した。浅薄な中川などと違って、自分の読みは深いとの自負が、漱石のいつもの韜晦を喚びおこしたのではなからうか。講演が復刻されたときの題目も「おはなし」とつれなかった。だが、そこで彼はつぎのようなきわめて重要な提言をしていた。

(中略)

人文学は、文理にまたがるすべての学術について、すべては人間が創出した学術であるとの立場から、共通点と差異を明らかにしつつ、学術の在り方を問うのを本務とする。工学者の卵を前にして、哲学を介して漱石が文学について論じた東京高等工業学校の場面は、日本の人文学の歴史にあぎやかに刻まれている。

(あかぎ あきお・英文学・学説史)

図④ 漱石の講演の意義を考察した赤木昭夫の論考(図書2014年4月号(第782号), 20-25, 2014, 図①参照)

の途中だから出られません) というのですが、ちょうどそれを書いているところに、私の妹婿の鈴木^(注5) が参りまして、それを見て、相手は西園寺候ではあり、はがきとはあんまりひどいじゃないかとか何とか言っておりましたが、本人はいっこう平気なもので、「ナニこれで用が足りるんだからたくさんだよ」とか何とか申して、それを投函してしまいました。

漱石の講演内容

(1914.1.17, 大正3年)

私は、この学校に来るのは初めてだけれども、ご依頼を受けたのは決して初めてではありません。2, 3年前、田中さん^(注6) から頼まれたのです。その頃頼みに来てくださった方は、もうご卒業なさったでしょう。それ以来、数十回の依頼を受けましたが、みんなお断りました。断るのは面白いからではなく、止むを得ないからで、この止むを得ないことが度重なってお気の毒なので、その結果、今日やって来ました。言わば根くらべて根が尽きて出てきたようなしまつ。面白い話も出来かねます。今からとにかく一時間ばかり話します。それ故、題なんかありません。◆私は専門があなた方とは全然違っています。こんな機会でなければ、顔を合わすことはありませんが、それでも私は工業の部門に属する専門家になろうとした

事がありました。私は建築家になろうと思いましたが。何故ってというような問題ではない、けれども話のついでに話します。……あんな無愛想な人があられだけ流行る(はやる)のは、やはり技術があるからだと思いました。故に建築家になったら私も門前市をなすだろうと思いました。高等学校時分の事でしたが、親友が私に説諭しました：「くだらない家を建てるよりは文学者になれ」と……そして文学者になりました。その結果は分かりません。恐らく死ぬまで分からないでしょう。……◆以前に「日本現代の開化」という題で講演したことがあります。「開化」とは人間のエネルギーで、これが二つの異なる方向に延びていったのが、入り乱れて出来たので、その一つはエネルギーを節約せんとする努力(距離をつめる、時間を節約するなど)で吾々の生活の便を計るのです。これがあなた方の専門のもので、他の方向はエネルギーを消費せんとするもので文学・美術・音楽・劇等です。私らはこの方面へ向かっていく。この方面からいえば時間・距離なんて云う考えはありません。飛行機のような速いものの必要もなく、堅牢なものも必要もなく、数でこなす必要もない。生涯にたった一つだけいいのを書けばいいのです。即ち、(時短、量産を目指す) あなた方とはかく反対になっているのです。◆二つのものの性質を概括して云う時は、あなた方の方は規律で行き、私共の方は不

規律で行く。……あなた方は自由が少ないが、私共は自由というものが無ければ出来ない仕事であります。……あなた方の方でする仕事というものをみると普遍的すなわち Universal な性質をもっている。私共の方は Universal でなく、Personal な性質を持っている。……(だからといっていい加減ではなく)我々の方でも時には法則が必要です。なぜに必要であるかといえ、これがために作品に Depth が出てくると云う問題になるからである。あなた方の法則は Universal のものであるが、我々のものは Personality の奥に Law があるのです。というのは、既にできた作品を読む人々の頭の間をつなぐ共通のものがあつた時、そこに Abstract の Law が存在しているので、Personal なものが Universal なものでなくとも、百人なり二百人なりの読者を得たとき、その読者の頭をつなぐ共通のものがなくてはならぬ。このものが一つの Law である。文芸は Law によって Govern されてはいけぬ。Personal である。Free である。……そのものの性質より云えば、(あなた方の方は誰が作ったかは余り問題にならないが)吾々の方のものは Personal なもので、作品を見て作った人に思い及ぶ。……これ程までに芸術とか文芸というものは Personal である。Personal であるから自己に重きを置く。主がなくなったら Personal がなくなるのは当たり前で、自己

が無くなれば、芸術はダメである。あなた方が尊ぶことは己でなくて腕である。……吾々の方は人間であると言うことが大切なので、社会上より云うときは、お互いに社会の一員であるけれども、吾々の方は人間ということが大事になる。……◆あなたの方では技術と自然との間に何らの矛盾もないが、私共の方には矛盾もある。即ちごまかしがきくのです。悲しくないのに泣いたり、嬉しくもないのに笑ったり、腹も立たないのに怒ったり、……これは一種の Art である。Art と人間の間に距離を生じて矛盾を生じやすい。あなた方にも人格にない Art を弄していることもたくさんある。……かく Art は恐ろしい。吾々には Art は二の次で人間が第一なのです。孔子様でなければ人格がない、なんて云うのじゃない。人格と云うたって偉いということでもなければ、偉くないということでもない。個人の思想なり観念なりを中心とするのである。◆一口で言えば、文芸家の本体すなわち Essence は人間であって、他のものは附属品・装飾品である。この見地より世の中を見渡せば面白いものです。私一人かも知れませんが、世の中は自分を中心としなければいけない。……（私たちが世代を重ねるように）芸術家が（能のような）昔の芸術を後世に伝えるために生きているというのも一面では必要かもしれないが……そのように身を殺して仁をなすのは Personality の論法でいくと感心しない。伝承的な文芸家・美術家も必要かもしれないが、人間の本分として、Essential な Personality を発揮することを自覚しなければならぬ。◆このところが大切なところで十分に説明しなければならぬんですが、今日は時間が無いから之で止めます。私の云うた事はあなた方と私共の職業の違いから、私共の方を詳しく云うただけけれども、あなた方の方も或る程度までは応用がききます。あなた方の職業の方面に於いて、幾分か参考になることがあるでしょう。もっとも文芸部の会ですから応用がきかなくても、威張って左様に云う権利があります。個人としてなり職業としてなり、ご参考になれば非常に私は嬉しい。

講演の後日談 1

失望：よせばよかったという後悔の念

本学の関係者にとってショッキングな随筆が夏目漱石によって書かれた。朝日新聞に連載されていた『硝子戸の中』^(注7)の34回目で、次のような内容だ。

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間 高等工業で講演をなすったそうですね」というから、「ああやった」と答えると、その男が「何でも 解らなかつたようです」と教えてくれた。それまで自分の云った事について、その方面の掛念(けねん)をまるでもっていなかった私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。「君はどうしてそんな事を知ってるの」。この疑問に対する彼の説明は簡単であった。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に関係のある或家(うち)の青年が、その学校に通っていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。「いったいどんな事を講演なすったのですか」。私は席上で、彼のためにまたその講演の梗概(こうがい)を繰り返した。「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」、「解らないでしょう。どうせ解りやしません」。私には断乎(だんこ)たるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは、止(よ)せばよかったという後悔の念であった。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断ったのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があった。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言(いちごん)で、みごとに粉碎されてしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかつたのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。◆これはもう1、2年前の古い話であるが 去年の秋 またある学校で、どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になって、ついにそこへ行った時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の



図⑤ 本学の文芸部が発行した「東京工業大学70年記念誌」の表紙(1951)。

題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたため、私は演壇を下りる間際(まぎわ)にこう云った。——「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判然(はつきり)しないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得(ごなつとく)の行くように説明して上げるつもりですから」。私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かつたように思う。しかしそれから4、5日経(た)って、三人の青年が私の書齋(はい)に進入(はい)して来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧(ていねい)な手紙を書いて、面会の時間を拵(しら)えてくれと注文して来た。◆私は快(こころ)よくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確かめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であったが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に対して採(と)るべき方針についての疑義を私に訊(き)こうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前(せま)に逼(せま)った問題を持って来たのである。◆私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与え

たか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかったそうです」と云われた時よりも遥（はるか）に満足なのである。

講演の後日談 2

誤解にもとづく失望だったことが判明

漱石曰く：この稿が新聞に出た2, 3日あとで、私は高等工業の学生から4, 5通の手紙を受取った。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充（み）ちていた。なぜ一学生の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併（あわ）せて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨（むね）を公けにするのである。

本学の学生も

事の顛末を記録していた

漱石の講演を聞いた本学の文芸部員は、講演の1年後（1915、大正4年）に出された漱石のコメント（『硝子戸の中』第34話）に、漱石以上に落胆した。講演から37年後の1951年（昭和26）に文芸部が編纂した「東京工業大学70年記念誌」（図⑤）に次のような思い出話が載っている。

学生の記憶の中の漱石（1）

「30年前の想出」各務鑛三

（大正4年、図案科選科）

（カガミクリスタルの創業者）

大正4年ごろは浅草文庫だったか、蔵前文庫だったか校友会雑誌があった。現在民芸で活躍しておられる濱田庄司君の意匠である豪放な木版の表紙は他校の同様

誌と比べて断然光っていたものである。その頃校友会で夏目漱石氏と相馬御風氏（注8）をお願いして講演をして貰ったことがある。御風氏はベルグソンの哲学という題でむつかしかったが、漱石先生のは判り良くて話の條（すじ）は、漱石先生自身が生まれつきの偏屈で人に嫌われる事をよく知っているから、医者（注9）になれば腕さえ良ければ患者はしかたなしに来る、それで医者になろうと思った。蔵前の諸君は技術を身に付けるから、藪（やぶ）でない限りこの点大丈夫だろうという様なお話であった。これが後日大問題になった。漱石先生後で、講演の趣意は恐らく蔵前の連中には判らなかつたろうと云ったとか、云わなかったとか、久しい間、蔵前の秀才を馬鹿にするなど怒つたものである。……

学生の記憶の中の漱石（2）

「風俗記」遠山静雄

（大正5年、電気、舞台照明家）

……こうした真面目な、堅苦しい学校であったが、ささやかながら音楽部も文芸部もあって、すきな者が集まって居た。人間の自然な欲求からであろう。◆文芸部の講演会に、夏目漱石先生を招聘したことがある。（三十数年前のことで）講演の内容は記憶して居ないが、その後で、当時先生が朝日新聞に連載されていた『硝子戸の中』に「よせばよかったと云う後悔の念」が強く胸を打つたという文章が発表された。そのいきさつはこうである。……【以下、前述の漱石の随筆（後日談1 & 2）が引用されている】……私もいきり立った一人であるが漱石先生へ手紙を出した中に入っているかどうかは記憶にない。今にして思えば、（漱石に「告げ口」した）かの文学士の蔵前学生観は、嫌味はあるが、多少の妥当性も認められる様に思い、またそれが蔵前学生の瑕瑾（かきん、全体としてすぐれている中であって惜しむべき小さな傷）にもならぬと思う。……



図⑥ 江頭淳夫（江藤 淳）：江藤淳（えとうじゅん）はペンネーム。1932年東京に生まれ、慶應義塾大学文学部、同大学院に進む。在学中の1955年、『三田文学』に夏目漱石論を連載。それまでの漱石像をくつがえし、漱石研究の新境地を拓いた。大学院を中退後、ロックフェラー財団の招きで渡米し、プリンストン大学で教鞭をとる。1971年、東京工業大学社会学助教授として招かれ、1973年文学教授。当初、社会学概論を、次いで文学概論の講義を担当。『漱石とアーサー王伝説』、『決定論夏目漱石』、『もう一つの戦後史』、『海は甦る』など多くの作品を著した。1976年日本芸術院賞受賞。【出典：本学の130年史、写真：教員総覧1985】

漱石に関連した本学の教員

江藤 淳（図⑥）：漱石といえば、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか」と見当がつかぬ。」という書き出しで始まるデビュー作が有名だ。漱石作品の研究・評論では、本学教授を務めた江藤淳が第一人者だった。江藤さんは20年近く（1971～1990）本学で教鞭を執つた後、母校の慶応大学に移った。本学に新しく生命理工学部がスタートする年だったので強く印象に残っている。江藤さんは最愛の妻を癌で失ってからは、体調を崩したこともあって、自ら、文芸評論家としての人生に幕を引いた（1999年、66歳）。本学で担当していた科目は「文学概論第一」と「文学概論第二」で、「近代以前として、徳川中期以来幕末にいたる文学と思想を検討しつつ、文学諸ジャンルの相互関係」について講義していた。同僚の目から見た「江藤淳」像は、『工学部ヒラノ教授と7人の天才』（注10）で垣間見ることができる。



図⑦ 伊藤整：本名は整（ひとし）。1905年北海道に生まれる。1925年小樽高商を卒業，中学教諭となる。1926年処女詩集『雪明りの路』を自費出版。1927年東京商科大学（現一橋大学）に入学，フランス文学を学ぶ。その後中退。1929年処女小説『飛躍の型』を書いて詩から小説に転じた。ジョイスの『ユリシイズ』などを翻訳するとともに，1932年，評論集『新心理主義文学』を出し評論家として活動。1949年発足の本学（工学部）英語教室の英文学専任講師として迎えられ，1958年教授，1964年退官。1963年『日本文壇史』で菊池寛賞受賞。1965年日本近代文学館理事長。1967年日本芸術院賞受賞。【出典：本学の130年史】

伊藤 整（1905～1969）（図⑦）：1949年に本学に着任し，英語を教えるかわら，小説家・文芸評論家として活躍した。着任翌年に翻訳したD.H. Lawrenceの『チャタレイ夫人の恋人』がわいせつ文書にあたるとして警視庁の摘発を受け，裁判になった。最高裁で有罪とされたが（1957），本学では優遇され，1964年まで勤めている。伊藤さんは，この裁判を題材に『裁判』というドキュメンタリーを書いている。わいせつか芸術か，新憲法のもとで言論の自由は守られるのかなど，注目を集めた裁判ただけに，本学の心理学教授 宮城音弥（1908～2005）^{（注11）}も伊藤さんを支援した。当然 授業中も裁判のことに話が及ぶ；「心理学の授業だったが，今もよく覚えているのは『チャタレイ夫人の恋人』だ」という受講生が多い。

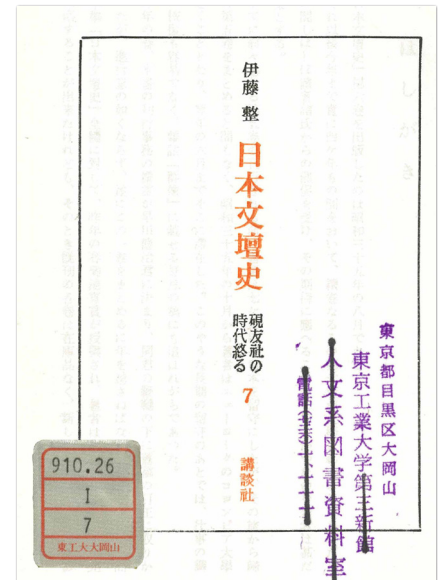
伊藤さんは、『女性に関する十二章』（1954）がきっかけで一躍人気作家になり，よく徹夜で原稿を書いていた。そのせいか，当時伊藤さんの授業を受けた学生の話では，

「成績は，ほとんど満点を貰った」そうだ；丁寧に採点する暇がなかったのかも知れない。

伊藤整は，もう一つ話題性の高い“作品”^{（注12）}を残している。日光の華厳の滝（けごんのたき，97 m）は，袋田の滝（茨城県，120 m）と那智の滝（和歌山県，133 m）と共に，日本三大名瀑の1つに数えられているが，「不可解な」悲劇の舞台になったことでも有名だ。今から111年前（1903年，明治36），夏目漱石の教え子だった旧制一高生が華厳の滝から身を投げた。傍らのミズナラの木を削って，そこに遺書と思われる「巖頭之感」（がんとうのかん）が書かれていた。その内容は厭世観（えんせいかん）を壮麗にうたいあげたもので，多くの人の心をとらえ，単なる世間的な話題にとどまらず，マスコミ関係者や知識人などを巻き込んだ議論に発展した。

社会の注目を集めたもう一つの理由は，上記のような哲学的な理由は副次的なもので，漱石が授業中にこの学生を叱責したことが直接の原因となったとも考えられたからだ。さらにその後，失恋説も出てきて，数十年を経過した後でも週刊誌（週刊朝日，1986年7月11日号）で取り上げられるほど注目度の高いものだった。その記事では，華厳の滝への身投げから83年目にして“恋人への遺書”が発見されたと報じ，年上女性への片思いが原因だった可能性があるとしている（その女性は天寿を全うしたので実名報道；後述するように本学教授の母でもあった）。

この週刊誌報道の20年前に，伊藤整はすでに問題の“恋人への遺書”の存在をどこからか聞きつけ，同僚だった本学教授の崎川範行（1909～2006）から極秘情報を聞き出し，日本文壇史7巻^{（注11）}（図③）に，夏目漱石関連の出来事として，「明治36年（1903），漱石が一高，東大の講師となる……（一高生）自殺事件とその反響……」という見出しでまとめている。身投げした一高生の憧れの的になって



図③ 日本文壇史7巻のタイトル頁（扉）。抹消線のある第三新館は取り壊され，跡地に現在の西8号館が建設された。それに伴い，人文系図書資料室は本館奥の旧々図書館に引っ越した。その後，人文系図書資料室は西9号館に移され，跡地は人事課の書庫として使われていたが，2013年度からは，「資料館」の一部となっている。

いたのが，娘時代の崎川さんの母親だった。以下，伊藤整の解釈を見てみよう。

【日本文壇史7巻7章 p.135～139（1964）からの引用，一部改変；全文は本学の図書館で読むことができる】その学生は，父を早く失ひ，母の手に育てられ，弟妹三人があった。……少年時代から哲学に興味を持っていた。……◆彼は年弱（飛び級で一高に入学）だったためか，一高に入学して以来思ふほどの成績を上げられなかった。彼は自信があっただけにそれを苦にやんだ。その学生は札幌で育ったのだが，この頃彼は，東大の裏門のすぐ前の邸宅に，幼少時代札幌で顔見知りだった若い女性が住んでゐるのに気づいた。彼はその人を懐かしく思ひ，次第に愛着するやうになった。彼はその家のまはりをさまよひ，しばしば手紙を書き送った。だが彼女は学生より二つ年上で，彼の気持ちには動かされず，反応はなかった。学生は悩んだ。……◆1903年（明治36）5月の中頃，夏目はその学生に訳読をあてた。

学生は昂然（こうぜん）として「やつて来ません」と言った。夏目は「なぜやつて来ないのか？」と訊いた。学生は「やりたくないからやつて来ないんです」と答へた。夏目は怒ったが、氣持を鎮めて「此の次にはやつて来い」と言った。何日かあとに、また夏目がその学生にあてた。その時も学生は下読みをして来なかつた。夏目は「勉強をする氣がないなら、もうこの教室に出なくてもよい」と言つて叱つた。5月21日の朝、その学生は恋心を寄せていた女性の家を訪ね、玄関で本人に自分の日記と本を渡して去つた。その本は高山樗牛（ちよぎゅう、1871～1902）の『滝口入道』（平家時代の悲恋物語）で、色々な書き入れがしてあつた。そしてその日から学生は行方不明になつた。……（中略）……学生の死は色々な形で各新聞に報ぜられたが、このことは全く表に現はれなかつた。26日の朝、その学生のいたクラスの第1時間目が夏目金之助（漱石の本名）の英語の時間であつた。夏目は教壇へ上るなり、最前列の席の生徒に向つて、心配さうな小さな声で言った。「君、彼はどうして死んだのだい？」「先生、心配ありません、大丈夫です」とその生徒が答へた。「心配ないことがあるものか。死んだんぢやないか」と夏目が言った。夏目は数日前に教室で叱つたことが学生の死の原因になつてゐるやうな氣がしたのである。

恋人と目された女性は話題の学生より二つ年上で、本郷の屋敷から人力車で麹町の女子学院に通つていた。神田方向から一高に通う学生とは道すがら挨拶を交わし、時折、学生が手紙を手渡すような間柄にすぎず、学生の氣持ちがから回つていたやうだ。

崎川さんは、自分の母親の独身時代の話（一高生との関係）は2回しかしていないという。最初は1957年（昭和32）秋で、当該一高生の親友でかつその妹と結婚し、後に文部大臣を務めた安倍能成だつた。もう一度は、本学の同僚だつた伊藤整から、『日本文壇史』に書き残したいのでどうでも教えてほしい」と迫られて母の抱える秘

密を話した。母が1982年（昭和57）に97歳で亡くなつた時に、遺品の中から“焼いたはず”の学生の手紙と書き込みのある本『滝口入道』が出てきて驚いたそうだ。手紙と本は、歴史的資料として、日本近代文学館（伊藤整が設立に尽力した）に寄贈した。こら辺のやり取りを週刊朝日がスクープしたもの（1986年7月）と思われる。

一高生が、華嚴の滝を見下ろす断崖絶壁の上に立ってよんだ辞世の句「巖頭之感」は、当時の時世とマッチして「人生不可解」という流行語を生み、身投げの原因（注13）についても、厭世・漱石・失恋というように、いろいろと取りざたされたが不明のままとなっている。

新しい『漱石全集』を編集した 本学出身者

私たちが実験の生データーにこだわるように、漱石の自筆原稿にこだわり、10,000枚近い原稿を一字一字でいねいに読み込み、新しい視点から『漱石全集』を編集した異能の人（秋山豊、図9）がいた。過去形で書かなければならないのは、つい先日（2015.1.21）すい臓がんのために70歳で亡くなつたからだ。秋山さんは、本学の工学部 応用化学科を1968年に卒業し、工業材料研究所（現応用セラミックス研究所）で助手として、金属酸化物の焼結

反応に関する研究に従事した後、1972年から2004まで、岩波書店に勤務した。40代半ばまでは自然科学分野の書籍の企画・出版にかかわつたが、それ以降は、漱石好きだったこともあって志願して漱石全集の編集者になり、異能を存分に発揮した。

夏目漱石は、自筆原稿が多く残っている作家だそうだが、それでも秘蔵されているものや、公開されても年に数日だけというものも少なくない。メモ帳を片手に読み込むのは並大抵ではなかつた。秋山さんは古本屋や古書市を頻りに訪れたが、買わずにメモを取るの、嫌われ氣味だつたやうだ。秋山さんのお陰で、私たちが見聞きしてきた漱石の作品『ころ』や『こゝろ』は編集者の誤解（とみなすべき）で、原稿では『心』だつたことや、『坊ちゃん』にでてくる「真面目になつて…」は、自筆原稿では「真面（まがお）になつて…」だつたことなどが判明した。漱石に寄り添う姿勢が漱石ファンの心をつかんだといえそうだ。

漱石全集の副産物として、秋山さんが上梓した『漱石という生き方』や『漱石の森を歩く』も高い評価を得ている（朝日の書評）。これまで私たちが接してきた野心的な文芸評論とは対照的な読み方を提示したとも言える。理系のセンスを持った秋山さんだからこそ成しえた仕事で、今も静かに波紋が広がっている。



図9 秋山豊（1944～2015）：本学助手から岩波書店に転じ、後半生は漱石の“森”に分け入つた（秋山豊著「漱石の森を歩く」、トランスビュー、2008）。

図10 漱石全集（新編集版、第1巻は「吾輩は猫である」、岩波書店、1993）

図11 秋山豊著、「漱石という生き方」、トランスビュー、2006

漱石の手書き原稿をそのまま（活字にしないで）出版することを企画した際には、消極的な意見が多かったが、いざ『直筆で読む「坊ちゃん」』を出版してみると予想外によく売れたようだ。国民的作家として、お札の顔（図⑩）になったのも頷ける。

『こころ』の解釈を巡る物議

作家の秦恒平（1935～、図⑫）は56歳から60歳の定年までの4年半、本学の教授を務めた。階段教室に入りきらないほどの学生を前に「文学」を講じた。双方向型授業として話題になり、新聞等でも紹介されたから、覚えている人も多だろう。秦さん自身も、そのときの経験をもとに、『東工大「作家」教授の幸せ』（平凡社、1997）という本を書いている。秦さんは、漱石の読み方、特に『心』の解釈を巡っては、柔軟であるべきだと主張し物議をかもした。従来の明治高等遊民の利己と明治の精神への殉死という定説的な読み方とは対照的な大胆な解釈を試みた（『名作の戯れ—「春琴抄」「こころ」の真実』、三省堂、1993）。

私たちの心の動きは複雑で、ちょっとした刺激（財産・異性・名誉など）で制御不能な雪崩を起こし、他人の運命を狂わせるのみならず、時として命までも巻き込む結果となる。この雪崩に対するけじめのつけ方（責任の取り方）は時代や人によって様々だが、明治時代の“高等遊民”の典型例が描かれたのが「こころ」だという解釈が一般的だった。秦さんは、しかし、裸の王様の読み方をし、コロブスの卵的な実演をして見せた。読者にゆだねられた結末（私と静の関係は、静の夫が明治の精神に殉じて死んだ後どうなるのか？）を『戯曲・こころ』（漱石原作・秦恒平脚色、俳優座公演）の中で、二人は結婚するように描いた。その根拠は『漱石「心」の問題』（「湖の本」版元、1998）に詳しく述べられている。



図⑫ 秦恒平と舞台パンフレット『心—わが愛』（1986〔昭和61〕年10月8日初演）

秦さんと『心』の出会い：…やがて、一人の女性に出逢いました。…と言っても、それは、転校して来たばかりの、一つ上級、中学三年生の女の子に過ぎませんでしたが、しかしその人は、たちまち、大きな大きな存在になりました。その人も、私を、愛してくれました。が、あつというまに卒業して、家庭の事情もあり、そのまま…まったく私の手の届かない、遠くへ、姿を消して行ってしまったんです。…運命…でした。その人は、卒業式のあとで、私を呼び寄せまして、手紙と、記念の贈り物とを手渡してくれました。贈物は、一冊の文庫本でした。夏目漱石の、題が…『心』だったんです。あれから、『心』を、何十度読んだことか。…大事に大事に読んで、読んで…（講演録から引用）

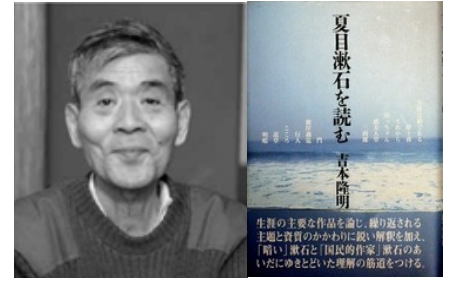
吉本隆明の評論

最後に、本学出身の著名な思想家・評論家であり、晩年には本学の世界文明センターの特任教授も務めた吉本隆明（1924～2012；1947電気化学科卒、図⑬）の著述を紹介しておきたい：『漱石の主題』（春秋社、1986年）、『夏目漱石を読む』（筑摩書房、2002；小林秀雄賞を受賞）、『漱石の大きな旅』（日本放送出版協会、2004）。

資料の移管・寄贈のお願い

本学にも資史料館（博物館 資史料館部門）ができたので、今後は、歴史的に重要な文書が失われることはないと期待されるが、それも関係者の方々に貴重な文書類を資史料館に移管するという手続きを踏んで頂いて初めて可能となるので、積極的な移管をお願いしたい。

（注1）月刊『図書』：古今東西の名著の



図⑬ 吉本隆明（よしもと たかあき）と漱石に関する著書。

1924〔大正13〕東京生まれ。1944年本学電気化学科に入学。1947年、卒業後、中小工場に就職するが、労働組合を組織して失職。1949年、本学の特別研究生試験に合格し、給与を受けながら無機化学教室で学ぶ。1951年、東洋インキ製造(株)に就職。1954年、詩集『固有時との対話』、『転位のための十篇』で『荒地』詩人賞受賞。『高村光太郎』（1957刊）などで文学者の戦争責任や転向を問い、論壇に登場。文学・サブカルチャー・政治・宗教など、幅広い領域で多様な評論・思想活動を行い、戦後最大の思想家と呼ばれる。2006年から本学の世界文明センター特任教授。（出典：東京工業大学130年史、p371）

裏話、心を打つヒューマン・ストーリー、人生への思索などを綴るエッセイを掲載した読書家のための小雑誌。高校時代から『図書』を定期購読している野木さんによれば「物理学・化学・生物学・天文学・考古学・文化人類学などの先生方も寄稿しているのでコンパクトな教養雑誌」としてお勧めだそうだ。

（注2）赤木昭夫、「ベルクソンとの交響—漱石の哲学遍歴（最終回）」、図書2014年4月号（第782号）、20-25、2014。赤木さんはNHKで科学番組を担当した後、慶応大学や放送大学の教授を務めた。私共の博物館の特命教授である道家達将とは旧知の仲で、放送大学では同僚だったことから、今回の記事を書くにあたっては大いに盛り上がった。赤木さんには本学の1年生向けの特別講義の1コマを担当して貰ったことがある。世話教員は道家達将だったが、多くの教員までが聴講につめかけてくれ嬉しかったようだ。科学番組や報道のあり方、さらには説得力の鍛え方に加え、英語の速読の勧めも学生には有益だったようだ。チェルノ

ブイリの原発事故（フランスのワインへの影響まで取材していた）や日航機の御巢鷹山墜落事故などの扱いはジャーナリストとしての高い見識がにじみ出ている。

(注3) 夏目漱石, 「おはなし」(講), 浅草文庫(大正3年5月号)第31号, 1-9, 1914。山下浩(監修), 漱石復刻全集3「漱石評論・講演復刻全集」第7巻 明治45年(大正元年)~大正3年(1912~1914), ゆまに書房, 217-225, 2002。

(注4) 夏目鏡子(述)・松岡譲(筆録), 「漱石の思い出」, 文春文庫, 文藝春秋, 1994。丹治伊津子, 『『虞美人草』の頃—西園寺首相をソデにした漱石』, 虞美人草「京都漱石の會」会報3号, 6-8, 2009: “百年の後に生き残るものこそ, 世を照らすものであるというのが, 漱石の志であった。どのような学問の権威であろうとこの世は, 「百の博士も土と化し, 千の教授も泥と変ずる」のが習いだと見通す目はまことに厳しい。「文を以って百代の後に伝へんと欲する」ために(大学教授の道を蹴ってまで)選んだ作家の道であれば, 漱石が(職業作家としての)第一作となる作品に渾身の情熱をそそぐのは当然……(トイレに象徴される『虞美人草』の執筆を優先するのは当然だったと思われる)”。

(注5) 鈴木禎次(1870~1941): 静岡市に生まれ, 東京帝大工科大学造家学科を卒業し, 三井銀行建築係, イギリスとフランスに国費留学

(1903, 明治36)。帰国後は, 名古屋高等工業学校(現名工大)の建築科教授を務めた。「西園寺首相をソデにした漱石」事件が起きたのは, 鈴木が建築学教授をしていた1907年。

(注6) 浅草文庫の後付けには, 編集兼発行人として田中喜一の名がある。

(注7) 随筆『硝子戸の中』:『こゝろ』と『道草』の間に書かれた随筆で, 書齋を「硝子戸の中」と見立てている。1915年(大正4)1月13日~2月23日にかけて39回にわたって朝日新聞に掲載された。最後の随筆となった(漱石が50歳目前で亡くなったのは, 1916.12.9)。物議をかもししたのは, その34回目。

(注8) 相馬御風ではなく, 中澤臨川(1878~1920, 文芸評論家・電気工学者)と思われる[夏目漱石, 「おはなし」(講), 浅草文庫(大正3年5月号)第31号, 1-9, 1914]。

(注9) 医者ではなく, 建築家と思われる。[夏目漱石, 「おはなし」(講), 浅草文庫(大正3年5月号)第31号, 1-9, 1914]。

(注10) 今野浩, 「工学部ヒラノ教授と7人の天才」, 青土社, 2013。江藤淳と吉田夏彦(記号論理学, 現名誉教授)が犬猿の仲だったことは有名だが, 当時を知る人の話では, 2人がとうとう銀座で決闘をしようと言出し, その立会人を頼まれた道家達将は困り果てたことがあったそう

だ。立会人の機転で鉄砲が舌鋒となり, 最後は酒を飲んで平穏な別れとなった。道家さんは“決闘”場所として指定された煉瓦亭は今もよく覚えていた。「両雄並び立たず」とはよく言ったものだが, 両雄を並び立たせた道家さんもたいしたものだ。

(注11) 宮城音弥も伊藤整と同じ1949年に本学に着任している。自著「心理学入門」(岩波新書)を副読本として受講生に勧めていた。精神医学が専門で, 「患者さんがドアを開けて入ってきて座るまでの間に, ほぼ診断がつく」といつていた。最終講義の時は, テレビカメラ写りがいいようにと軽く紅をさしていたのが印象的だった。

(注12) 伊藤整, 日本文壇史(講談社)7巻, 7章, 1964(昭和39年)。取材元となった崎川範行(燃料工学)と当博物館の道家達将は, 現役時代に親しかったが, “華厳の滝”は話題に上らなかったそう。

(注13) 最近の分析: 堀正士, 「一高生の“哲学的自殺”についての精神病理学的一考察」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 第22号, 139-146, 2012。

2014年10月
増補版 2015年6月

(発行) 東京工業大学 博物館 資史料館部門
http://www.cent.titech.ac.jp/Publication_Archives/pg701.html



博物館部門

東京工業大学 博物館



資史料館部門

152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 centsairy@jim.titech.ac.jp
<http://www.cent.titech.ac.jp/>

大谷清(館長, 理事・副学長)
亀井宏行(教授, 博物館部門長)
奥山信一(教授, 兼任)
内川恵二(教授, 兼任)
広瀬茂久(特命教授, 資史料館部門長)
道家達将(特命教授)
遠藤康一(特任講師)

阿児雄之(特任講師)
渡利美知子(補佐員, 司書)
渋谷真理子(補佐員, 司書, 資史料館)
尾野田純衣(補佐員, 学芸員)
佐々木裕子(補佐員, 学芸員)
益津玲子(補佐員, ライター)
鎌田裕介(資史料館 文書担当)

本間英子(資史料館 文書担当)
山田瑞絵(資史料館 文書担当)
広報・社会連携課(博物館担当)
秋友豊香(課長)
長池宏哉(グループ長)
乙津昌弘(主任)
茂垣義範(事務全般)